

インドネシア語と日本語の初対面会話における第三者「ほめ」

－本連鎖のパターンと機能に着目して－

広島大学

KUSUMAWATI Mutia

1. 研究背景と目的

国際交流基金（2018）によると、インドネシアの日本語学習者数及び日本語教育機関数は世界2位であり、非漢字圏の国ではもっとも多い。しかし、上級インドネシア人日本語学習者であっても、日本人とコミュニケーションする際には言語使用の違いに戸惑うことがある。特に、インドネシア人は日本人の「ほめ」に関して「おおげさだ」、「ほめられたらどうすればいいかわからなくて困る」などの印象を持つ（Kusumawati, 2020）。

「ほめ」とは、「話し手が聞き手を心地よくさせることを意図し、聞き手あるいは聞き手に関わりのある人、物、ことに関して『良い』と認める様々なものに対して、直接的あるいは間接的に、肯定的な評価があると伝える言語行動である」（金, 2012, p.43）。

「ほめ」に関する違和感はインドネシア人が日本人と接触する際に、円滑なコミュニケーションの妨げとなる恐れがある。特に、初対面会話では人間関係がまだ構築されていないため、コミュニケーションが円滑に行われないと、その後の人間関係にマイナスの影響を及ぼす可能性がある。これらの問題を回避するための日本語指導を考えるには、日本語と母語であるインドネシア語はどのように異なるかを明らかにする必要がある。また、コミュニケーション上の「ほめ」の特徴を明らかにするためには、会話参加者の相互作用を考慮し、談話レベルの「ほめ」を見る必要がある。

Kusumawati・永田（2021）によると、談話レベルでは、インドネシア語と日本語ともに「ほめ－返答」の隣接ペアのパターンが最も多く見られるが、日本語ではそのような隣接ペアが繰り返されることが多い。そのため、一つの話題における「ほめ－返答」のやりとりがインドネシア語よりも長い。また、日本語では「ほめ」はターンを取得せずに行われる場合も多く見られるが、インドネシア語ではこのような「ほめ」のパターンはあまり見られない。

会話における発話は、ターンの有無によって「実質的発話」と「あいづち的発話」に分類される（杉戸, 1989；メイナード, 1993）。「ほめ」を行う際にもターンを取得して行われる「ほめ」（以降、「ターン有ほめ」とターンを取得せずに行われる「ほめ」（以降、「ターン無ほめ」）がある。「あいづち的発話」や「ターン無ほめ」は、聞き手が話し手の話を聞いてい

る、理解している、興味を持っていることを示し、会話の進行を助ける働きをする重要な会話の要素である (Goodwin, 1986; 吉田他, 2009)。

これらの研究では主に聞き手に対する「ほめ」(以下、「対者ほめ」)を対象としているが、「ほめ」には「対者ほめ」と「第三者ほめ」が存在する。「第三者ほめ」とは聞き手以外に対する「ほめ」のことである(古川, 2000; 2002)。このうち、初対面会話における「第三者ほめ」には「ほめ合い」というパターンが見られる(永田, 2014)。「ほめ合い」とは会話の参加者が互いに同じ対象をほめるというものであり、共通の感覚や価値観を持つことを相互に顕在化して確認する機能を持つ。また、その結果、その後も関連する話題が展開されやすい。このように、初対面会話における「第三者ほめ」は人間関係の構築や話題展開に重要な役割を担っている。

これらのことから、初対面会話における「第三者ほめ」について、学習者の母語と比較しつつ、使用実態を明らかにすることは、円滑なコミュニケーションを実現するための日本語指導を考える上でも重要であると言える。そこで、本研究では、インドネシア語と日本語の初対面会話における「第三者ほめ」に着目して、両言語の類似点と相違点を探ることを目的とする。

2. 先行研究と残された課題

2.1 「第三者ほめ」の定義

「第三者ほめ」とは、「ほめ」の対象が、①ほめ手と受け手の両方に関わるもの、②ほめ手と受け手の両方に関わらないもの、③ほめ手に関わるもの、④一般的なことがらであるもの、を指す(古川, 2000; 2002)。本研究においても、上記の定義にあてはまる「ほめ」を「第三者ほめ」として扱う。

2.2 「第三者ほめ」の研究手法

これまで、「第三者ほめ」に関する研究は少ない。古川(2000; 2002)では、書き言葉のデータを使用し、「第三者ほめ」の機能や使用実態が明らかにされている。しかし、書き言葉のデータでは、日常生活と離れている場面も多く、書き言葉のデータにおける「第三者ほめ」の特徴と日常会話における「第三者ほめ」の特徴は異なる可能性がある。

会話データを用いた「第三者ほめ」の研究には永田(2014; 2016)がある。永田(2014)では、日本語母語話者の初対面会話における「第三者ほめ」には、会話の参加者が互いに同じ対象をほめるという「ほめ合い」のパターンが見られると指摘されている。このように、会話データを使用することで、会話における参加者の相互作用や会話における「ほめ」の展開パターンを明らかにすることができる。

しかし、会話参加者の相互作用を包括的に明らかにするには、ターン（発話権・話者交替）の観点も不可欠である（メイナード, 1993）。「対者ほめ」では、「ほめ」がターンを取得せずに行われる場合もあり、「あいづち」としての機能も果たしている（Kusumawati・永田, 2021）。そのため、会話における「第三者ほめ」に関わる会話参加者の相互作用を明らかにするには、ターンの観点も取り入れる必要がある。

また、言語によって「ほめ」は異なるパターンで行われる可能性がある。日中接触場面において、中国語を母語とする日本語学習者はこのような「ほめ」の「ほめ合い」のパターンが見られていない（永田, 2016）。しかし、言語によって「ほめ」のパターンが異なることをより正確に言えるには、他の言語も見ることが必要である。さらに、ある言語の特徴をより明確にするためには、他の言語と比較することが有効であると考えられる。しかし、現時点では、インドネシア語と日本語における「第三者ほめ」の特徴、類似点、相違点はまだ明らかにされていない。

2.3 「ほめ」の本連鎖パターンと機能の関わり

「ほめ」を行う際には、その前後に「ほめ」に関わるやり取りが見られることが指摘されている。これらは『「ほめ」の連鎖』と呼ばれており、「先行連鎖」、「本連鎖」、「後続連鎖」に分けられる（熊取谷, 1989；金, 2004；2007）。本連鎖は「ほめ」の談話中に現れた最初の「ほめ-返答」のやり取りである（金, 2004）。

「対者ほめ」では、「ほめ」の連鎖パターンは、言語によって異なることが指摘されている（金, 2007；2012；Kusumawati・永田, 2021）。インドネシア語と日本語では、「先行連鎖」と「後続連鎖」には相違点が見られていないが、本連鎖には明らかな相違点が見られた（Kusumawati・永田, 2021）。具体的には、日本語では、「ほめ-返答」の隣接ペアが繰り返されることが多いのに対して、インドネシア語では、「ほめ-返答」の隣接ペアは1回のみ現れることが多いと指摘されている。

また、両言語の本連鎖では、「ほめ」がターンを取得せずに行われる場合も見られ、「あいづち」としての機能も果たしている。あいづちは聞き手としての言語行動であり（メイナード, 1993）、応答系感動詞（うん、ええ、yeah）、語彙的応答（なるほど）、評価的応答（すごい、oh wow）など様々な表現形式で行われる（Goodwin, 1986；吉田他, 2009）。それぞれの表現には異なる機能があり、応答系感動詞は話し手の意図が未確定時に、語彙的応答は話し手の意図が確定した際に、聞き手が送る「話を理解した」という合図である（今石, 1998）。また、評価的応答は相手の発話内容に対する評価が含まれるターンなし発話であり（Goodwin, 1986；吉田他, 2009）、先行の発話内容によって形式が異なる。評価的応答には否定的な評価や肯定的な評価がある。本研究では、肯定的な評価的応答を「ターン無ほめ」として扱う。

しかし、「ターン無ほめ」は、日本語では一つの話題の中で何回も行われるのに対して、インドネシア語ではあまり見られない。インドネシア語では、「ほめ」が行われる際に、ターンが取得されることがほとんどであり、「あいづち」としての使用が極めて少ないと言われている。このように、インドネシア語と日本語を対照する際に、本連鎖のパターンや本連鎖に現れる「ほめ」の機能が異なるため、特に本連鎖に着目する必要があると考えられる。

一方、「第三者ほめ」に関しては、日本語の会話における本連鎖では、会話参加者が同じ対象を双方にほめるという「対者ほめ」には見られない「ほめ合い」のパターンが観察され、「談話展開の手掛かり」としての機能を果たす(永田, 2014)。しかし、先行研究では「ターン有ほめ」にしか着目されていないため、「ターン無ほめ」が「第三者ほめ」にどのように関わりながら、談話が展開されるのかについてはまだ明らかにされていない。

したがって、初対面会話における「第三者ほめ」に関して、インドネシア語と日本語の類似点と相違点を明確にするためには、「ターン有ほめ」だけではなく「ターン無ほめ」も含め、本連鎖パターンを包括的に捉えて分析する必要がある。また、日本語の書き言葉では「ほめ」対象を聞き手に薦める「薦め」という機能を有する(古川, 2000)。しかし、会話では「第三者ほめ」が「薦め」として使用されるか、どのようなパターンで現れるかは分からない。

このように、「ほめ」がどこで現れ、どのようなパターンを有するかは、「ほめ」の機能と密接に関わる。しかし、先行研究では日本語における「第三者ほめ」の談話機能の一部しか明らかにされておらず、インドネシア語に関しては、そのような観点からの研究は行われていない。

2.4 先行研究に残された課題

これまでの研究では、主に「対者ほめ」を対象にして、「ほめ」の連鎖パターンや機能が明らかにされてきた。しかし、「ほめ」には聞き手をほめる「対者ほめ」だけではなく、その場にはいない人物や事柄を対象にした「第三者ほめ」もある。「第三者ほめ」の本連鎖では、聞き手も「ほめ」を行い、「ほめ合い」が生起する可能性がある。これまでの「ほめ」の連鎖パターンに関する研究では、主に「対者ほめ」に着目されてきたため、「第三者ほめ」で見られる「ほめ合い」の実態は明らかにされていない。さらに、「第三者ほめ」の本連鎖パターンに「ターン無ほめ」がどのように関わるかについても不明である。

また、先行研究では談話において「ほめ」はどこで現れるか、どのようなパターンが見られるかは、そこで用いられる「ほめ」の機能と密接に関わるが、従来の研究ではその一部が指摘されているのみである。

「ほめ」の展開パターンは言語によって異なるが、異なる文化背景を持つインドネシア語と日本語を比較することで、「第三者ほめ」の普遍的な特徴と各言語に固有の特徴を明らかにすることができると考えられる。

以上をふまえ、本研究の課題として以下の3点を設定する。

- 1) インドネシア語と日本語において、「第三者ほめ」の本連鎖にはどのようなパターンがあるか。
- 2) インドネシア語と日本語において、「第三者ほめ」はどのような機能を持つか。
- 3) インドネシア語と日本語において、「第三者ほめ」の本連鎖パターンと機能はどのように関わるか。

3. 分析資料

3.1 対象

本研究のデータは日本語母語話者10組とインドネシア語母語話者10組の自由談話である。参加者はいずれも面識のない大学院生同士である。参加者には同年代・同性の相手と30分程度の自由会話をしてもらった。大学院では年齢と学年が必ずしも一致していないため、極端な年齢差がない限り、「ほめ」に及ぼす影響は小さいと考えられる。そのため、本研究では、対象者の年齢を同年代とし、年齢差を最大2歳に限定した。対象者の平均年齢は24歳である。

データ収集の際、調査対象者に調査の概要を説明した後で、自己紹介を伴った30分程度の自由会話をするように指示した。なお、自然な「ほめ」を収集するために、「ほめ」に関する指示や説明は行わなかった。予備調査として、それぞれの言語で2組の自由会話を収集した。その結果、両言語ともに「ほめ」が見られることを確認した上で本調査を行った。すべての会話はICレコーダーで録音され、調査対象者が会話している際に、筆者はその場から離れた。会話データを文字化したものを本研究の分析資料とする。文字化の際に使用した記号は表1の通りである。

表1 文字化で使用した記号

INS ¹⁾	JNS ²⁾	意味
?	?	疑問発話
.	。	疑問発話以外の発話終了
..	..	終了せずに中断された発話
(発話者:)	(発話者:)	重なっているあいづち的発話
太字・下線	太字・下線	ほめ

¹⁾ インドネシア語母語話者。

²⁾ 日本語母語話者。

3.2 コーディング

本研究では、談話資料に見られた「第三者ほめ」を分析対象とする。「ほめ」の認定はそれぞれの言語における「ほめ」の表現形式に基づいて行った。日本語における「ほめ」の表現形式（評価語：「素晴らしい」、事実指摘：「初めて見たよ」等）は大野（2003）、インドネシア語における「ほめ」の表現形式（評価語：「bagus」、神様への言及：「masya Allah」等）は Kinanti（2014）を参考にした。

本研究では「本連鎖」に着目するが、「ほめ」の機能を正確に把握するために、話題の文脈も考慮する必要がある。したがって、「先行連鎖一本連鎖一後続連鎖」を含む話題範囲のやりとりを見る。また、「ほめ」は対象に影響されるため、詳細に話題を区分する必要があると考えられる。従って、本研究では詳細に話題区分を行なっている筒井（2012, p.39）に基づいて、話題を区分した。詳細な分類基準は以下のとおりである。

- 1) それまで話題となっていた対象とは異なる、新しい対象や事態への言及
- 2) すでに言及された対象や事態の異なる側面への言及
- 3) すでに言及された対象や事態の異なる時間における様相への言及
- 4) すでに言及された対象や事態について、それと同種の対象や事態への言及
- 5) すでに言及された個別の対象や事態の一般化

なお、永野（1959, 78-83）では、隣接している文には、展開や補足などの関係があると述べられているため、本研究では1～2発話程度で現話題から逸れているように見える発話は、同じ話題における展開や補足とした。

次に、話題内のやりとりをさらに連鎖に区分する。連鎖の認定に関して、「先行連鎖」と「後続連鎖」は「対者ほめ」と同様に、金（2007；2012）の定義を参考にした。「先行連鎖」とは「本連鎖の前に、『ほめ』となんらかの関連のある実質的発話から始まるやりとり」、後続連鎖」とは「本連鎖の後に、実質的発話から始まるやりとり」である。

一方、「本連鎖」に関しては、「対者ほめ」を対象にした従来の研究における定義では、本研究で対象とする「第三者ほめ」の中心を構成する本連鎖を明らかにすることが難しい。そのため、本研究では本連鎖を「ターン無ほめを含め、話題中の最初の『ほめ』から最後の『ほめ』までのやり取り」と定義する。

「ほめ」、「話題」、「連鎖」のそれぞれの認定の信頼性について、本研究のデータの20%を、筆者とそれぞれの母語話者である第二認定者として認定を行い、一致率をカッパ係数で計った。それぞれの一致率は0.90³⁾以上を達成していたため、信頼性が保証されたと言える。

それぞれの要素を認定した結果、インドネシア語では378、日本語では488の話題が抽出された。インドネシア語では第三者に関する話題は111（29.4%）、会話参加者に関する話題は

³⁾ コーディングの一致率：

話題区分：INS $k=0.95$, JNS $k=0.92$ ほめ認定：INS $k=0.96$, JNS $k=0.93$ 連鎖：INS $k=1$, JNS $k=1$

257 (70.6%) であった。一方、日本語では、第三者に関する話題は172 (35.2%)、会話参加者に関する話題は316 (64.8%) であった。その中で、「第三者ほめ」が含まれる話題は、インドネシア語では19 (17.1%)、日本語では57 (33.1%) が観察された。これらの話題における「本連鎖」を着目し、分析を行う。

なお、古川 (2000; 2002) では、「第三者ほめ」の対象は4つに分類されたが、本研究における日本語とインドネシア語のデータを見た場合、どちらかの会話ペアのみに見られた分類というものはない。

4. 分析結果

本研究では「第三者ほめ」の本連鎖のパターンとそこに見られる「ほめ」の機能について分析するが、まず、「ほめ」の出現率を見ておきたい。インドネシア語の「第三者ほめ」の出現率 (全話題の5.1%) が日本語 (全話題の11.7%) と比較して少ない。永田 (2016) では、日本語母語話者に比べれば、中国母語話者における「ほめ」の出現率が低いという。本研究と先行研究の結果から、「第三者ほめ」の出現率は言語によって異なることが示唆される。

次に、「第三者ほめ」の本連鎖におけるパターンを見る。分析資料から「単独ほめ」、「ほめ合い (挿入発話あり)」、「ほめ合い (挿入発話なし)」、「連続ほめ」という四つのパターンが観察された。

表2から、インドネシア語では「単独ほめ」(36.8%) と「ほめ合い (挿入発話なし)」(31.6%) が多く使われていることがわかる。一方、日本語では、「ほめ合い (挿入発話なし)」(42.1%) が最も多く使用され、それに次ぐ「連続ほめ」(26.3%) が二番目に多く使用されていた。

表2 第三者「ほめ」の本連鎖の使用傾向

本連鎖のパターン	INS		JNS	
	数	割合	数	割合
単独ほめ	7	36.8%	10	17.5%
ほめ合い (挿入発話あり)	3	15.8%	8	14.0%
ほめ合い (挿入発話なし)	6	31.6%	24	42.1%
連続ほめ	3	15.8%	15	26.3%
合計	19	100%	57	100%

また、「ほめ合い」や「連続ほめ」など一つの話題に「ほめ」が複数現れる場合、インドネシア語では「ほめ」の出現率は2.25回であり、最多で3回現れていた。それに対して、日本語では、「ほめ」の出現率は2.94回であり、最多で9回現れていた。このように、インド

ネシア語に比べて、日本語では「ほめ」が含まれる話題が多いだけでなく、一つの話題における「ほめ」の出現率も高いことが分かる。

以下においては、それぞれの本連鎖のパターンを具体的にみることをとおして、同じパターンの「ほめ」でも談話展開上の働きが異なることを示す。

4.1 単独ほめ

「単独ほめ」とは、一つの話題の中に「ほめ」が一つのみ現れるものである。「単独ほめ」の具体例を談話例(1)(インドネシア語)と談話例(2)(日本語)に示す。

談話例(1)(インドネシア語 男性同士)

No 話者 発話内容

- 1 IM03 Saya juga ini kok, lagi mau nyari (sepeda).
私も、これから、新しいの(自転車)を探したい。

話題転換

- 2 IM04 Kayak Pak F.
Fさんみたいにさ。
- 3 IM03 Iya. Pak F nyari sepeda pas mau pulang kan?
うん。Fさん、帰るときに探したよね？
- 4 IM04 **Mantap itu (sepeda) euy. Edan.**
あれ(自転車)はすごいよ。やばい。
- 5 Dia tuh nyari di auction atau di mana?
オークションとかで探したっけ？
- 6 IM03 Paling di auction.
オークションなんじゃない。
- 7 Nanti lah, kemarin baru beli komputer.
でも、また今度にするわ。この前パソコン買ったばかりだし。

話題転換

談話例(1)では、発話2～6が一つの話題(「Fの自転車」)を形成しており、発話4に「ほめ」が見られる。インドネシア語では談話例(1)のように「ほめ」が話題の途中に現れる話題は6件(「単独ほめ」の85.7%)あった。

また、この時、「ほめ」は「薦めの補助」の機能として活用されている。談話例(1)の発話2で、IM04は自転車を買おうと思っているIM03に「Fさんみたいな自転車の探し方」を提案している。その後、自らの提案の説得力を強化するために、発話4でIM04はFの自転車

をほめることで、同様の探し方を IM03 に薦める談話を展開している。

書き言葉のデータでは、「第三者ほめ」は「薦め」の機能を持っていることが確認された(古川, 2000)が、会話データを用いる本研究では、「ほめ」は「薦め」そのものというよりも、「薦めの補助」として活用されることが明らかになった。

それに対して、日本語では談話例(2)のように、話題の最後に現れる「ほめ」が見られる(6件(「単独ほめ」の60%)。

談話例(2)(日本語 男性同士)

No	話者	発話内容
1	JM05	や, ○○<研究科名>とかやったら, そういう人って多くないですか?
2	JM06	あ, めちゃめちゃ。
3	JM05	多いすか?
4	JM06	うん。自分の同期が4人いて, (JM05:はい) で, 1人はまだ勉強続けたいって言って, (JM05:はい) 来年, アメリカの大学に博士か (JM05:え) なんかで留学行くって言って。もう1人が, 一応, 日本を拠点にしてる建築コンサルタントだけど, (JM05:はい) 結構, 海外も力, 入れてるところで, よく海外も行くみたいな (JM05:おー) のが1人いて。で, もう1人が, もう, 1年のうち10カ月以上海外飛び回るような (JM05:え) コンサルタントの仕事になってるから。
5	JM05	<u>(へー, すげえ。や, すごいです。)</u>

話題転換

談話例(2)で, 発話1~5は一つ的话题(「JM06の研究室の仲間」)を形成しており, 発話5で「ほめ」が見られる。談話例(2)の発話4で, JM06はターンを長く取りながら自分の研究室仲間の進路について話している。JM05はそれに関する情報を有しておらず, JM06の話聞きながらあいづちを打っているが, JF06から十分な情報を得た後に, JM05は発話5で「ほめ」を行っている。その後, 話題が転換されていることから, 日本語では「第三者ほめ」が「話題終結」あるいは「まとめ」としての機能も持つと言える。インドネシア語ではこのような「ターン無ほめ」の使用は見られなかった。

これらのことから, 日本語の「ほめ」は話し手によって伝達された情報や意見に対する聞き手の反応を示すためにも活用されるのに対して, インドネシア語では話し手が自らの情報や意見を相手に伝達するために活用されると考えられる。

4.2 ほめ合い（挿入発話なし）

「ほめ合い」とは、会話参加者が同じ対象をお互いにほめることである。具体例を談話例(3)（日本語）と談話例(4)（インドネシア語）に示す。

談話例(3)（日本語 女性同士）

No	話者	発話内容
1	JF01	あと、なんか、〇〇を入れてきたりとか。
2	JF02	あー、ありますね。テストでも〇〇（JF01：うん）について聞かれたり。
3	JF01	僕が今から言う〇〇の答えを書いてください、みたいな。
4	JF02	ああ、ありました。
5	JF01	難しい。
6	JF02	<u>Z先生、ほんといろいろできるんですよ。（JF01：うん）〇〇もできるし、〇〇語もできるし。（JF01：へえー）あと、〇〇も弾けたり（JF01：えー）して、ほんとすごいです。</u>
7	JF01	<u>（何でもできる）。</u>
8	JF02	<u>何でもできちゃう。あ、テニスも得意。（JF01：へえー）</u>
9	JF01	<u>（すごい）</u>
10	JF02	<u>びっくりしました。（JF01：うーん）ほんとにすごい。何でもできちゃう。</u>
11	JF01	<u>じゃ、なんか、学生時代、もてそう。いろんなことできて。</u>
12	JF02	はい。（JF01：へえ）

話題転換

談話例(3)の発話6～11で、JF02とJF01は「Z先生の特技」についてほめている。両者ともにZ先生を知っているが、JF02はZ先生のゼミ生であるのに対してJF01はZ先生の授業を受けたことがある程度で、Z先生に関する情報量はJF02よりも少ない。多くの情報を持つJF02は、発話6、8、10でターンを取ってZ先生に関する情報を提供しながら「ほめ」を行なっている。他方、JF01は、JF02から提供された「ほめ」に対して、自らも肯定的に評価していることを示すために、発話7と発話9で、「ターン無ほめ」をあいづち的に行なっている。

このように、日本語では、会話参加者間で情報量に差がある場合、情報量が多い側は「ターン有ほめ」、情報量が少ない側は「ターン無ほめ」を用いて「ほめ合い」が展開されることが明らかになった。日本語では、情報量に差がある話題が14件観察され、全て「ほめ合い」のパターンで現れた。一方で、インドネシア語では、情報量に差がある話題が8件観察され、「ほめ合い」のパターンで現れたのは2件（25%）のみであり、比較的少ないことが分かった。

次に、インドネシア語における「ほめ合い」の例を以下に示す。

談話例(4) (インドネシア語 女性同士)

No	話者	発話内容
1	IF01	Tapi kalo anak-anak yang di bawah sekarang (IF02: hmm) ngerti pun tidak (IF02: Oh, iya ya). Karena kan sekarang orang tua (JF02: udah kayak, oo), Bahasa Inggris (IF02: Bahasa Inggris). でも、最近の若者って (IF02: うーん) 全然 (地方言語が) 分からないのよね (IF02: あ, そうそう)。だって、最近の親は (IF02: なんというか, ああ), 英語 (IF02: 英語)。
2	IF02	Bahasa Indonesia (IF01: Iya, ya). Belum lagi, kalo misalnya bapak sama ibunya nikah, kayak beda suku, (IF01: kayak, iya.) gitu kan. Beda kewarganegaraan. インドネシア語<公用語>とか (IF01: そうそう)。あと、父と母が違う民族で結婚するとか, (IF01: そんな, そう) そんな感じ。国籍が違うとか。
3	JF01	<u>Padahal kece loh, kalo orang bisa bahasa daerah.</u> <u>地方言語ができる人って格好いいのにね。</u>
4	IF02	<u>Iya. Jadi apa, ya. Jadi dia bisa kayak ngeblend gitu</u> (IF01: iya) <u>sama masyarakat lokal.</u> (IF01: iya bener) そう。 <u>なんというかね。うまく交流できるっていうか</u> (IF01: そう), <u>現地の人とね。</u> (IF01: はい, そう)
5	IF01	Sama kalo kita tinggal disini kan, (JF02: hmm mm) kalo kita tidak bisa bahasa sini, kita (JF02: iya) ndak bisa serap seutuhnya... 省略 あと、ここに住んでいたらさ, (IF02: うんうん) ここの言語ができなかったら, 私たち (IF02: はい) 完全には理解できなくて...省略

話題転換

インドネシア語の「ほめ合い」は談話例(4)のように行われる。談話例(4)を見ると、発話3～4においてIF01とIF02は交互に「地方言語ができる人」に関して、それぞれターンを取得して「ほめ」を行っている。インドネシア語の「ほめ合い」は、全て会話参加者間に「ほめ」の対象に関する情報量の差がない場合に現れることが明らかになった。インドネシア語において情報量に差がある場合については談話例(7)で述べる。

4.3 ほめ合い (挿入発話あり)

「ほめ合い」が見られる場合には、「ほめ」の間に挿入発話が見られる場合もある。このよ

うな「ほめ合い（挿入発話あり）」について以下に見る。なお、「挿入発話」とは「ほめ」と関係する実質的な発話のことである。「ほめ合い（挿入発話あり）」の具体例を談話例(5)(日本語)と談話例(6)(インドネシア語)に示す。

談話例(5)(日本語 女性同士)

No	話者	発話内容
1	JF02	は、あ、Z先生、ご存じですか？
2	JF01	Z先生の授業を、なんか、他にこう、〇〇<授業名>みたいな、(JF02:あー、はい)受けてて。(JF02:うーん)あ、ただ、Z先生に認識されるレベルじゃないと思うんですけど。(JF02:うーん)
3	JF02	あ、そうなんですね。はい、はい
4	JF01	<u>うん、面白い先生。</u>
5	JF02	<u>授業、分かりやすい (JF01:うん) ですよ。</u>
6	JF01	でも、確かに、受けに行ったときに、私、その、〇〇<専攻名>の同期の子と受けたんですけど、(JF02:はい)周りがもう8割方〇〇<国名>の人で、(JF02:うーん)あれ、授業合ってるかなっていうような。
7	JF02	ほんとそうですよね。(JF01:うん、うん)もう、前の方ほとんど留学生(JF01:うーん)みたいな感じで。
8	JF01	(沈黙1秒) <u>まあ、それもあって、すごい分かりやすいというか、やさしい日本語で (JF02:うーん) 授業してくれるから。</u>
9	JF02	あ、そうですね。

話題転換

10	JF01	え、そのZゼミも、じゃあ、(沈黙 1秒)ほとんど〇〇<国名>人の方です？
----	------	--------------------------------------

発話1で、JF02はZ先生に関する話題を展開するために、相手(JF01)もZ先生に関する情報を有しているかどうかを確認している。発話2で、JF01は自分もZ先生について知っていることを示すとともに、発話4で「面白い先生」と肯定的な評価(「ほめ」)を行っている。それを受けて、JF02もZ先生の授業を「分かりやすい」と肯定的に評価している。その後、発話8でJF01が再びZ先生の授業を評価しており、両者による「ほめ合い」が行われている。ただし、そのような「ほめ合い」の途中には、Z先生の授業がわかりやすい理由(「留学生が多いこと」)を補足する挿入発話が見られる。

このように、挿入発話を伴いながら「ほめ合い」が行われている。発話8ではZ先生の授業の分かりやすさについて言及されているが、これは発話5でJF02の「授業、分かりや

すいすいですね」を具体化したものであると言える。

次に、インドネシア語の談話例を見てみる。

談話例(6) (インドネシア語 女性同士)

No	話者	発話内容
1	IF06	Karena maksudnya, ee, interaksi sama orang luar (IF05: iya) nya kan lebih banyak. Kayak Bali Lombok gitu kan. なんとというか、えーと、外との交流が (IF05: はい) 多いし。バリ島とかロンボック島とか。

話題転換

2	IF05	<u>Nggak tau, mungkin emang orang Indonesia hebat kayaknya sih.</u> <u>よく分からないけど、インドネシア人ってやっぱりすごいかもよ。</u>
3	IF06	<u>Kata aku sih gennya emang kuat sih</u> (IF05: kali iya) <u>hmm.</u> <u>私は遺伝が強いと思う。(IF05: そうかもね) うん。</u>
4	IF05	Mungkin orang normal, misalkan kita yang makan yang udah basi, kita masih sehat. Aku pernah makan basi, sehat-sehat aja. 多分普通の人 (インドネシア人) は、例えば腐っているもの食べても、大丈夫だよ。私、腐っているもの食べたことがあって、全然大丈夫だったよ。
5	IF06	Loh jangan sedih. Selama itu belum terlihat jamur yang sangat terlihat, makan. もちろんよ。目立つカビさえなければ、食べる。
6	IF05	<u>Kalau kata temen aku, gitu aja nggak mati berarti orang Indonesia tu kuat. Iya, aku iyain aja.</u> <u>私の友達が言っていた、「そんなことでは死なないから、インドネシア人ってやっぱり強いね。」って。私も「そうだね」って。</u>

話題転換

7	IF06	Siapa yang bilang jamur nggak mati? 誰がそんなこと言ったの?
---	------	---

談話例(6)では「新型コロナウイルスの感染リスクが高い地域」についての会話が行われていたが、発話2でIF05は「インドネシア人のすごさ (体の強さ)」について肯定的な評価を行っている。それを受けてIF06も「Kata aku sih gennya emang kuat sih (遺伝が強いと思う)」という発話を行っているが、その前提には「インドネシア人はすごい」という前提がある。IF05はさらに発話6でインドネシア人の強さについて、友達のことばを引用しながら言及し

ており、「ほめ合い」が見られる。そのような「ほめ合い」の途中には、インドネシア人の強さについての具体例が挙げられており、この点で、談話例(3)で見た日本語会話と同様である。

ただし、挿入発話の後の「ほめ」に関しては、日本語会話と違いが見られる。談話例(5)では、相手の「ほめ」を具体化する形で「ほめ合い」が展開されていたのに対して、談話例(6)では、先に行った自らの「ほめ」を発展させる形で「ほめ」が行われている。

日本語では、「ほめ合い（挿入発話あり）」のパターンで現れた話題は8件あり、そのうちの6件（75%）が相手の「ほめ」を具体化する形で展開された。それに対して、インドネシア語では、「ほめ合い（挿入発話あり）」のパターンで現れた話題は3件観察され、全て自らの「ほめ」を発展させる形で展開された。この点で、挿入発話が含まれる場合には、日本語の「ほめ合い」の方が、挿入発話後の展開が相手志向型であると言えよう。

また、4.1節で述べたように、インドネシア語では「ターン無ほめ」は「話題終結」として活用されていないのに対して、日本語では5件（8.8%）見られた。しかし、談話例(5)と談話例(6)を見ると、「ターン有ほめ」の場合は両言語（インドネシア語では5件（26.3%）、日本語では13件（22.8%））において「話題終結」として活用されていることが分かった。

さらに、談話例(6)の発話2で見られるように、「ほめ」は「話題開始」としても活用される場合がある。このような談話例はインドネシア語で1件（5.3%）、日本語で8件（14%）観察された。このことから、両言語において「ほめ」は「話題開始」としても活用されるが、インドネシア語に比べると、日本語での使用がやや多いことが明らかになった。

4.4 連続ほめ

最後に、「連続ほめ」について見る。「連続ほめ」とは、一方の参加者のみが連続して（2ターン以上）「ほめ」の対象をほめるものである。具体例を談話例(7)（インドネシア語）と談話例(8)（日本語）に示す。

談話例(7)（インドネシア語 男性同士）

No	話者	発話内容
1	IM04	Soalnya kan si, yang baru itu siapa, R gitu? Oh iya R. (IM03: iya) あれだね、新入生の、Rさん？ そうだ、Rさんだ。(IM03: はい)
2		<u>Kan awal ketemu kan, saya juga mikirnya orang Sunda gitu kan. Soalnya bisa Bahasa Sunda. Bahasa Sundanya juga lemes. Eh ternyata bukan. <u>最初に会った時は、スンダ<民族>人かと思った。だって、スンダ語<地方言語>ができるし。しかも丁寧なスンダ語。違った。</u></u>
3	IM03	Semarang dia.

彼はスマラン<地域名>出身だね。

- 4 IM04 Iya kan. Eh, jago euy berarti.
 でしょう。もう、すごいってことね。

(沈黙12秒)

話題転換

談話例(7)では IM04にのみ、「ほめ」が見られる。スダ語はインドネシアの地方言語の一つであるが、地方言語を話すことができる R を IM04は連続してほめている(発話2, 4)。IM04と IM03はどちらも R について知っているが、「R が話すスダ語」に関する情報は IM04のみが有している情報である。

このように、情報量に差がある場合、日本語会話では先に見た談話例(3)のように、情報量が少ない参加者が「ターン無ほめ」をあいづち的に行うことで「ほめ合い」が行われていたが、インドネシア語では、情報を持つ側のみが連続してターンを取り、「ほめ」を行っている。

談話例(8)(日本語 男性同士)

- | No | 話者 | 発話内容 |
|----|------|---|
| 1 | JF10 | あの、YouTube でホワイトノイズって分かりますか？ |
| 2 | JF09 | 何すか、それ？ |
| 3 | JF10 | ザ、ザーっていう音。 |
| 4 | JF09 | えー、(JF10:あ) こう、(JF10:そうです) 入ってこないようなやつ。 |
| 5 | JF10 | ザーっていう音再生して、こうやってザーザーって。 |
| 6 | JF09 | <u>あ、いいですね、それ。めっちゃいいですね。</u> ホワイトノイズって (JF10: うん) いうんですか。 |
| 7 | JF10 | ホワイトノイズっていう。 |
| 8 | JF09 | うん、分かった。 |
| 9 | JF10 | ザーっていう音がザーってして。 |
| 10 | JF09 | <u>え、それがいい。</u> (JF10:うん、や) |
| 11 | | しかもちょっと(雑音が)気になっちゃう自分がいるじゃないですか。(JF10:うーん) |
| 12 | JF10 | 気になっちゃうんですよ。 |

話題転換

日本語の談話例(8)では JF09のみが「ホワイトノイズ」について連続してほめている(発

話 6, 10)。直前の話題では、「雑音がある場所では集中できない」ということが話されている。それを受けて、JF10は「ホワイトノイズ」という音声動画を紹介して薦めている。そのような薦めに対して JF09は「ほめ」を連続して行っている。このように、相手から提供される情報に対して連続して行われる「薦めの受け入れ」としての機能は、インドネシア語には見られなかった。

5. 考察

まず、「第三者ほめ」の出現率と本連鎖パターンの使用傾向を見ると、日本語では一つの話題における「ほめ」の出現率が高いことが分かった。Kusumawati・永田 (2021) では、「対者ほめ」においても、同様の結果が述べられている。このような違いから、インドネシア語母語話者と日本語母語話者の接触場面において、インドネシア語母語話者が日本語母語話者の「ほめ」に対して「おおげさだ (ほめ過ぎる)」という印象を持つことにつながると思われる。

次に、「第三者ほめ」の本連鎖パターンと機能について、両言語の「第三者ほめ」には「話題開始」や「話題終結」としての機能がある。この結果は小玉 (1996) で述べられた「対者ほめ」と同様である。また、インドネシア語にも日本語にも「ほめ合い」のパターンが観察され、それによって当該話題が継続されていた。

しかし、両言語には相違点も見られた。インドネシア語では、話し手が「ほめ」の対象に関して多くの情報・意見を持っている場合に「ターン有ほめ」が見られやすく、「あいづち」としての「ターン無ほめ」はあまり見られない。「ほめ」には評価が含まれることから (Goodwin, 1986; 吉田他, 2009; 金, 2012), インドネシア語では当該事態に対する多くの情報・意見がないと「ほめ」を行いにいと考えられる。

それに対して、日本語では相手の発話内容に応じる形で「ほめ」が使用されていた。具体的には、「ほめ」の対象に関して多くの情報を持つ話し手の発話を「ターン無ほめ」によって継続させたり、話し手の発話の最後に「まとめ・話題終結」させたりする形で「ほめ」が用いられていた。「ターン無ほめ」は聞き手が話し手の話に興味を持っていることを示し、会話の進行を助ける働きをする重要な会話の要素である (Goodwin, 1986; 吉田他, 2009)。日本語ではこの機能が期待されるため、「ターン無ほめ」が多用されていると考えられる。

永田 (2016) では、中国語を母語とする日本語学習者は「ほめ合い」のパターンを構築していないと言われている。しかし、ターンの有無の観点から分析を行うことで、インドネシア語では「ターン有ほめ」の場合、「ほめ合い」が行われやすいが、「ターン無ほめ」の場合、「ほめ合い」が行われにくいことが明らかになった。

最後に、会話の中で「薦め」が見られる局面において、インドネシア語では「ほめ」によ

て「薦め」の行為が補助されるのに対して、日本語では相手からの「薦め」を受け入れる際に「ほめ」が用いられていた。

以上のことから、インドネシア語の「ほめ」は話し手が自らの情報や意見を相手に伝達するために活用されるのに対して、日本語では話し手の情報や意見に対する反応を示すためにも活用される。本研究を通して、インドネシア語と日本語の初対面会話において、「第三者ほめ」の本連鎖のパターンや機能が異なることが明らかになった。これらの相違点は、インドネシア語母語話者と日本語母語話者の接触場面において、両者に違和感を生じさせる可能性がある。異なる言語文化背景を有する者同士による円滑なコミュニケーションを実現するために、日本語教育現場において、本研究で明らかになったようなインドネシア語と日本語の違いをふまえた指導が行われることが求められる。

6. 今後の課題

本研究ではインドネシア語と日本語の初対面会話に見られる「第三者ほめ」について、本連鎖のパターンと機能の観点から分析を行った。その結果、「ほめ」の出現率および本連鎖のパターンと機能には相違点が見られることが明らかになった。ただし、「第三者ほめ」の対象には「両者に関わらないもの」、「両者に関わるもの」、「ほめ手に関わるもの」および「一般の事柄」の4種類があるが、本研究ではそれぞれの特徴を詳しく見るができなかった。「第三者ほめ」の対象をさらに分析し、それぞれの言語で「ほめ」の対象になる「第三者」には相違点があるかどうかをさらに分析する必要がある。

また、今回はインドネシア語と日本語のそれぞれの母語話者同士の会話を比較したが、日本語教育の指導について考えるためには、インドネシア語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者の接触場面会話において、どのような「ほめ」が見られるかをさらに分析する必要がある。いずれも今後の課題としたい。

参考文献

- 今石幸子「聞き手の行動：あいづちの規定条件」、『阪大日本語研究』5, 1993, 95-109.
- 大野敬代「人間関係からみた「ほめ」とその工夫について—シナリオにおける「働きかけ表現として」『早稲田大学 大学院教育学研究科紀要』別冊10, 2003, 337-346.
- 金庚芥「日本語の「ほめの談話」に関する一考察」『桜美林国際学論集 Magis』9, 2004, 77-91.
- 金庚芥「日本語と韓国語の「ほめの談話」」『社会言語科学』10 (1), 2007, 18-32.
- 金庚芥『日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究』ひつじ書房, 2012.
- Kusumawati, M., 永田良太. 「談話における日本語とインドネシア語の「対者ほめ」 - 「ほめ」の連鎖に着目して -」『ニダバ』50, 2021, 23-36.
- 熊取谷哲夫「日本語における誉めの表現形式と談話構造」『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究』2,

1989, 97-108.

国際交流基金『海外の日本語教育の現状2018年度 日本語教育機関調査より』国際交流基金, 2018.

小玉安恵「対談インタビューにおけるほめの機能—会話者の役割とほめの談話における位置という観点から」『日本語学』(15) 5, 1996, 59-67.

杉戸清樹「ことばのあいづちと身振りのあいづち—談話行動における非言語的表現—」『日本語教育』76, 1989, 48-59.

筒井佐代『雑談の構造分析』くろしお出版, 2012.

永田良太「談話のトピック展開から見た「ほめ」」『表現研究』99, 2014, 30-39.

永田良太「日本語母語話者と日本語学習者の接触談話における「ほめ」—中国語を母語とする上級日本語学習者を対象として—」『語文と教育』30, 2016, 139-150.

永野賢『学校文法：文章論』朝倉書店, 1959.

古川由理子「「ほめ」の条件に関する一考察」『日本語・日本文化研究』10, 2000, 117-130.

古川由理子「「ほめ」の種類—受け手に直接関係しない「ほめ」を中心に」『日本語・日本文化研究』12, 2002, 41-54.

メイナード・K・泉子『会話分析』くろしお出版, 1993.

吉田奈央, 高梨克也, 伝康晴「対話におけるあいづち表現の認定とその問題点について」『言語処理学会第15回年次大会発表論文集』2009, 430-433.

Goodwin, Charles. "Between and within: Alternative sequential treatments of continuers and assessments", *Human Studies*, 9, 1986, 205-217.

Kinanti, P. K. "Memuji dan merespon pujian dalam bahasa indonesia: Studi kasus di lingkungan mahasiswa dan acara hiburan televisi" (Unpublished master's thesis). Universitas Gajah Mada, Yogyakarta, Indonesia, 2014.

Kusumawati, M. "What indonesian think of japanese's compliment", *JAPANEDU: Jurnal Pendidikan dan Pengajaran Bahasa Jepang*, 5 (2), 2020, 58-68.